

しことを曰へるものにして、此の年が一三三二年に相當するものならざる可らざるなり。而して此の年は大石が北庭に來りし時より二年目、また遼を去りしより九年目に相當し、一般の形勢と何等牴觸する所あらざるなり、遼史本文によれば、大石は起兒漫にて即位したる後三年にして東歸し、馬行二十日にして善地を得、初めて都城を建てて虎思斡兒朶と名付くるに至りたりと記せども、西方史料にては西遼の都をみなベラサグンといへるなれば、虎思斡兒朶とは蓋し其の別名にして (Bretschneider, *ibid.* note 439 参照)、大石はイレクカン家に代りて此の地に君臨せし時より、既にまたこゝに都したるものなることを認めざる可らず、たゞ長春真人が「移徙十餘年、方至此(虎思斡兒朶所在地)」と記せるものは、大石が一三三二年に此の地に入りしことを否定するものなれども、もとよりこれ長春の誤聞と見るべく、必らずしも精密の數にあらず、たゞこゝに至る迄に十年内外の日子を費やしたるものと見るに於て參考に供し得べきのみ。若し精密に此の年數に據らんとすれば、大石が虎思斡兒朶に入りしは保大四年より十餘年の後、即ち一一三四年より數年の後に當り、之を彼が葛兒罕として位にありし十二年の年數と考へ合すれば、其の位に上りしは北庭地方にある間のことと見ざる可らざるに至るも、此の如きは遼史以下西方記録の上より考ふるも到底認め得べきことに非ず。

之を要するに、遼史の著者は大石が虎思斡兒朶に入りて葛兒罕の位に上り、爾來十年に亘りて此の地方の經略に従事し、後初めてサマルカンド地方に侵入せしを誤解して、彼が北庭より西して直ちにサマルカンド地方に入り此の地方を經略して初めて位に上り、國を建て、後東歸して虎思斡兒朶に據るに至れるものと見たる、其の記事全く逆顛せるものと曰はざる可らず。